

古和秀水付近略図



昭和六十一年八月、輪島市(旧門前町)では、名水「古和秀水」のある高尾山と南山間の「峨山道」を修復整備した。同コースは史蹟探訪の他に、自然探訪俳句吟行・遠征等で市民に親しまれている。

鬼屋神社(神明社)のソンベラ祭

鬼屋神社は、天照大神、豊受大神を祭神とする。古くは櫛比御厨の神明宮と称せられた。総持寺開山後はその守護神ともなった。創建は定かではないが、平安時代の末頃ではないかと思われる。二月六日の祭りは「なり祝い」(なりものを祝うの意)という。昔の耕作過程を偲ばせる特異な芸能が奉納される。これがいわゆる「ソンベラ祭」である。この芸能の中に「ソンプリ」という文言が繰り返し使われる事から転じて「ソンベラ祭」と呼ばれるようになった。この芸能は約七百年前、総持寺の興隆期に都の法師によってもたらされ、長い歳月の間「失念有間敷者也」として継承されてきたものである。この祭りは奥能登に伝承する唯一の田遊びとして昭和六十一年に、その脚本ともいふべき「農之次第」という一巻の古文書と共に県の「無形文化財」に指定されている。なり祝いは、拜殿の一角を水田に見立て、演ぜられる。



観音堂

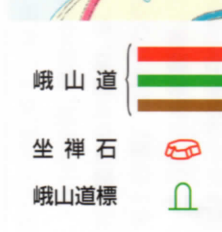
鬼屋集落の東方に高尾山という総持寺の霊場がある。もともと神仏混合で金比羅宮と観音堂立持寺があって、能登三十三番の札所中、二十八番の札所であった。
おひおひとたれしものぼる高尾山
みねはくほんの浄土なるらむ
高尾山に対するこの地方の人々の信仰は厚く、毎年五月十日の山開きには、近郷の人々がごちそうや酒を持って登り、一日ここで遊び、草相撲も行われたことがあったという。観音堂の建物は、棟札によると慶応三年(一八六七)六月、鬼屋村伊右エ門が願主となって建立したものであり、如來志希女がここを霊場として住んでいたが、今は荒れ果ててその面影はなく、「霊感水」の井戸と「南無遍照金剛」の石碑、登り道には山崎英尼の発願により、十方信者の浄財を得てつくられた西国三十三番の札所の石地蔵が残されている。



永光寺付近略図



峨山往來要図



櫛比神社の万歳楽土

創建は明らかではないが、古文書等からすれば平安時代末期～鎌倉時代～室町時代初期といわれる。古くは十二所権現(十二所宮)十二所少彦名神社(少彦名神社)薬師宮(諸岡比古神社)と称していた。現在の本殿は不幸にして明治八年十二月十一日火災に合い明治八年七月に再建され現在に至っている。春の例大祭で五穀豊穡を祈念し二月十一日夕刻から十二日に行われる祭典の最後に舞人が奉納する舞を言う。舞人が唱える「マンザイロクト」の詞章の間に参拝者からも「マンザイロクト」を唱和するので「マンザイロクト(万歳楽土)の祭り」と呼ばれるようになった。尚、この神事は鎌倉時代～室町時代(五～六百年前)に都からもたらされたものと言われる。二月六日の鬼屋神社(神明宮祭神一 天照大神豊受大神)で執行される春祭りの「ナリワイ」(ソンベラ祭)と一連の田遊びの行事として研究がなされている。



ソンベラ祭

総持寺の守護神である櫛比神社のお御輿を境内にお迎えして行われる神仏混交のなごりを残した祭り。住民はもちろん、監院老師から雲水までが守護神の行列が山門を渡るのを楽しみにしている。先導役の鬼面をつけた「ごうらい」が面白い。粛々と進行していくことから別名「葬式祭」と言われている。(7月18, 19日)



全線巡行コース

- 1日目 永光寺→四柳→金丸→眉丈山→上棚→安津見→館開→矢田→天行寺峠→豊田→土川
- 2日目 土川→北免田→西谷内→越ヶ口→安俱寺峠→中平→切留→上中→小石→南山→峨山→古和秀水→総持寺

一般巡行コース(春)

- 1日目 永光寺→四柳→金丸→眉丈山→上棚→花見月→眉丈が丘休憩所→奥山峠→安津見→代田→印内→遍照岳→刈越峠→萩内
- 2日目 上皇→虫ヶ峰→鳥越→西谷内→越ヶ口→安俱寺峠→中平→上中→小石→南山→峨山→古和秀水→総持寺

一般巡行コース(秋)

- 1日目 春に同じ
- 2日目 灯→植戸→越渡→上中→(以下の行程は春の2日目に同じ)

門前とどろ節

能登の門前 一度はおいで
ここにヤ名所もハ一明もある
(ハヤシ)ここにヤ名所もア一明もある
ハア一センザイ
響く鐘の音 千歳にこめて
町の誇りを寺でもつ (以下ハヤシくり返し)
能登の総持寺 筋交い橋を
死なぬ一期に渡りたや
へとどろくと 上堂の太鼓
鳴って続いた排の衣
へ夫婦鐘つく 灯ともし頃に
長谷の深底の鐘が鳴る
寺が高うて山低い

ハーゼンざい、ぜんざいと囃す荘厳、秀麗さを現している唄である。勅願所大本山総持寺では、第二代峨山禅師の死後、貞治三年から明治三年まで約五百年間、輪番制が布かれ、全国末寺から五名が選ばれ、住職に就任した。十月二日の交替期には、上番下番の僧侶や寺院関係者一千人以上も集まり、門前(寺口)は殷賑(いんしん)を極めた。職務(法務)受け渡しの法要が厳修された後、披露宴(おとぎ)の場となると、その席上で、この「とどろ節」がうたわれたという。囃子のぜんざいは仏語の善哉、よいかの意で、諸願満足、円融圓滿の意味がこめられている。宗教的色彩の濃い本町独特の民謡で、唄の名称はお堂で打ち鳴らす太鼓の響きを形容したといわれている。とにかく音曲は何となく人の心の奥深く浸り込んで清められるように、奥深さと気品をたたえ喜びと安心のうちに、いかにも落ちついた感じを与えてくれる。

茶釜

この茶釜は、総持寺二祖峨山禅師が、総持寺と永光寺を兼任していた時に、使用していたものである。朝夕、両寺間を往復の途中、小石の上田家に立寄ってお茶の接待を受けたときの茶釜であるといわれている。明治三十二年、大本山後堂町元香空和尚が由緒書を付ければ、此の釜と共に、同家の宝物として保存されている。茶釜の蓋は失われ、羽釜の端は欠け落ちているが、地肌といい、浮模様といい、芦屋風の茶釜である。



茶釜

輪番制指定文化財(昭和四十九年二月六日指定)